

2023 年度口語詩句奨学生作品選考総評

西躰かずよし

今回の奨学生への応募は 34 名であった。かつての選考評でも触れたが、応募人数としては少ないようにも見えるが、口語詩句投稿サイト 72h に投稿し、佳作選考となった作品の内から 10 作品を選んで応募するということが応募への条件となっていることから、書き手はそれが可能な時点で一定の力量を有しているといえることができるだろう。

そしてそのとおり、今回の応募者の水準はかなり高いものだと感じた。選考で悩ましかったのは、作風がすでに完成していて、10 作品ならべても連作として破綻のないことを優先するのか、書き手としての可能性、いわゆる全体の統一性よりも様々な新たな表現にチャレンジしている者を優先するのかということであった。ただ選考で悩みはしたもののそうした単純な二元論に収まるような書き手は、割合的にはそれほど多くなかったというのが実感である。作風がすでに完成しているような書き手にあっても、常に新たな表現を模索していることが伺えた。今回、私が奨学生で特に注目した書き手は、白野、長谷川柊香、さいうであったが、それぞれの作品をあげてみたい。

水泳の授業のあとの国語では
クラスのひとが少しあたらしい

白野

バファリンの表に B が彫られ冬

長谷川柊香

歩道橋から
親友へ手を振れば
世界にふたりだけのゆうぐれ

さいう

白野の描く世界は、実体験に基づくものかどうかは不明であるが、登場人物における心象風景のなまなましい描写が持ち味で、そのなかにある世界との違和感のようなものに惹かれる。次に、長谷川柊香の作品であるが、ことばを材料として緻密に作品が構成されており構造美が際立っている。それが全面に押し出されると、ある種の息苦しさにつながるが、ぎりぎりのところでとどまっているような印象を受けた。さいごにさいうであるが、そのみずみずしい語り口は、この書き手のおおきな魅力の一つで、日常を飛び越えていく物語の力強さに惹かれた。

あともうひとつ今回の特徴は、奨学生に選ばれた方とそうでなかった方との差が、ほとんどなかったことである。実際私が推して選ばれなかった応募者も多くいた。だから奨学生に選ばれなかったとしても書き続けてほしいと思う。奨学生に選ばれたかどうかは別にして、今回の応募作品で惹かれたものをいくつかあげてみたい。

灰暗い駅舎に宿るるるの気 マズルカ

ぽたあじゅのたふんと香る冬初め 篠遠 早紀

内定は花野にあるって聞きました あお

トイレットペーパー
すっと切れて雪 吉沢 美香

自我のないいいこだったね
文字の羅列だけが
世界で美しかったね 青野陽

なに食べても味しないけどレスポ
ールは平仮名だとなんか甘いボン
テージも 吉富 快斗

こうした作品との出会いは、私にとってうれしいものであった。一言、応募者の皆様にお礼を言っておきたいと思う。

最後に、この口語詩句奨学生の取り組みについて少し触れておきたい。詩句における賞は数多くあっても、口語詩句の書き手を奨学生に認定するという試みは、日本では佐々木泰樹育英会以外にはない。それはことばを、社会を変える力を持つものと本会が捉えているからだろう。

たとえば医学は人々が健康に生活できる時間をもたらし、工学は生活の利便性の向上に寄与する。また、法学や経済学は公正な社会の実現や裕福な社会の実現を目指す。こうした学問はわかりやすいかたちで社会に寄与しているということが出来るが、詩句はそういった地点には立ってはいない。

しかし、それでも死と隣り合わせの私たちは、ヴィクトール・E・フランクルや石原吉郎といった作家たちの根源的な問いを含む作品に出会うことに意味を見出す。ことばの力を信じるということは、生きることに役立つというよりも、その前提としての何故生きるのかという、問いのちからを信じるということに他ならない。だから応募者の皆さんも、ことばのちからを信じるものの一人として、この世界と対峙し、明日への一步を踏み出してほしい。そして、みなさんのその一步がこの世界の希望へとつながることを願って止まない。